

あとは読んでのお楽しみ1周年 special
『1丁目1番1号商店街の、とある1日』

作 司田由幸

1丁目1番1号商店街の朝は早い。

まだ夢見心地の街の片隅では、
お豆腐屋さんの大きなたらいで真つ白な豆腐が泳ぎはじめたし、
パン屋さんのオーブンでは食パンが香ばしい匂いをただよわせ整列している。
新聞配達のお兄さんのバイクが通り、あちこちでシャッターを開く音がガラ
ガラとリズムミカルに増えていく。
店先をほうきでシュッシュッと掃く音に交じって、

「おはようございます」「おはようございます」

そこかしこで挨拶が交わされる。
かけだす子どもたちのランドセルに向かって、金物屋さんが行ってらっしゃい
と声をかけ、

魚屋さんの白い発泡スチロールに敷きつめられた氷の上でサンマとがエビが飛
びはねる。

自転車屋さんの店先にはピカピカに磨かれた夏の空色、夕焼け、草原の緑
が並んでいるし、

青果店ではバナナが山をつくって、オレンジ、キュウイ、りんご、ぶどう、それ
ぞれ色鮮やかに座っている。

「こんにちは」「あら、こんにちは」

赤と青と白の縞模様がクルクル回る床屋さんでは、お爺さんがヒゲをじより
じより剃っている。

靴屋ではハイヒール、革靴、スニーカー、パンプス、長靴、学校の上履き。

ビーチサンダルから冬物のブーツまで、何百足もの靴たちが歩き出せる日
を夢見て足踏みしている。

お腹の調子が悪いお父さんが菓屋さんに駆け込む隣では、明日の婦人会の集まりにちよつとおめかしをしようとお母さんが服屋のバーゲン品をひやかし、

路地裏からは猫、猫、猫。

お寿司さんの水槽でタコがぐるりと体をくねらせたと思うと、本日特売と書かれたトマトが、キュウリやキャベツに横目で見られながら八百屋さんから旅に出る。

お茶屋さんの奥のテレビではお昼のニュース番組が流れている。

辺りは一時物静かになるが、都電は休みなく人々を運び続ける。太陽がゆつくりと西に傾きはじめる。

お惣菜屋さんから、いい匂いが漂って来るのも、ちよつどこの頃。

コロッケやメンチカツがカリッと揚がり、鶏の照り焼きはジューシーに焼きあがる。

ご自慢のポテトサラダはホクホクだし、お漬物もきんぴらもナスの煮浸しだつて、仲良く並ぶ。

街の台所として、商店街は今日もたくさんのお腹を満たす。

中華屋さんでは餃子をつまみにビールを傾ける早上がりのサラリーマンがいて、

お蕎麦屋さんでは漫画本を片手に学生が月見をすすする。

洋食屋さんでは休みのそろつた恋人たちが仲良くハンバーグを分けあつて、お肉屋さんのカウンターの前で長ネギを片手に気難しそうにすき焼きの肉を選ぶお婆さんがいる。

「おつかれさまです」「ごくろうさまでした」

「また明日」「ええ、また明日」

おやすみなさい。 おやすみなさい。

こころごとと灯った電気屋さんのたくさん蛍光灯が消えはじめ、ひとつ、またひとつとシャッターが下りていく。

そして…

1丁目1番1号商店街はひっそりと眠りにつく。

おはよう。

その声がまた聞こえてくる、明日まで。

おわり